ダグラスという男

西村　孝次
（元明治大学教授）

1891年１月の某日，オスカー・ワイルドはひとりの青年に会った。かれの母校オクスフォードの学生で16年下の青年アルフレッド・ダグラス卿だった。

わたしたちの国では美男より美女が多いようだが，ヨーロッパ，とくにイギリスとドイツでは美女よりもはるかに美男のほうが目につく。ダグラスは抜群の美男であったから，べつにロバート・ロス（1869—1918）に衆道を教えられていなくても，ワイルドがダグラスを同性愛——'The Other Love' の対象とするようになるのは，むしろ自然のなりゆきといえるであろう。

ところが，それが，異常な結果を招くことになるのである。

ダグラス（1870—1945）にとって，すべての快楽と不幸は，クイーンズベリー侯爵（1844—1900）の三男に生まれたことに由来する。バイロンの祖父も 'mad' だったが，この侯爵は医学的にはともかく心理的に 'mad' であったばかりか，さらに 'bad' であった。かれは妻シビルよりも馬を愛し子よりも犬を好んだ。スコットランドの名家で巨万の富を有しているくせに，たえず劣等と赤貧の脅迫観念にとりつかれていた。かれの唯一の功績は拳闘の規則を定めたことで，これはかれの名で呼ばれて今なお守られている。これを譬えていえば稀代のぶすが美容術の名著を書いたようなもので，こんな親から，ろくな子の生まれるはずはない。いや，長男のフランシス・アーチボルドは，りっぱな秀才だった。しかし将来を嘱望されながら，かれの上司ロウズベリー外相とのあいだのホモ醜聞に苦んでみずから命を絶った。あとに残った者のなかで，いちばん出来の悪いどら息子がダグラス，というわけである。

さて，そのダグラスとワイルドは同性愛へのめりこんでいく，のちにかれが『完本・獄中記』で綿々と訴えることになるように。それは，しかし，あくまで二人だけの私的な秘密であり秘戯であって，そのかぎりにおいて公共の秩序や善良の風俗とはなんのかかわりもない。もしワイルドがワイルドでなく，ダグラスがダグラスでなかったら，それは当時のイギリスのホモ人口のひとつの事例にすぎなかったであろう。つまり，とりたてて模範的な状態とはいえないとしても，きびしく糾弾すべきほどの事柄ではない。それだのに，それが糾弾され断罪されることになろうとは！

1895年２月14日の『まじめが肝心』の初演は，ワイルドの劇上演の最大の成功を収めただけでなく，作家としてのかれの最高の栄光を示すものでもあった。この成功と栄光が，

いついつまでもつづくとは思えなかったにせよ，あんなにも早くたちきれようとは誰もが予想しなかったところである。とつじょ、それから２週間後，思いもかけぬ破綻と没落が始まる。クイーンズベリー侯爵が「男色家を気どるオスカー・ワイルドへ」と記した名刺をワイルドはアルブマール倶楽部でうけとる（「男色家」という文字を侯爵は 'sodomite' ではなく 'somdomite' と綴っていた）。そんな一顧の価値すらない侮辱を，なぜワイルドは無視しなかったのか，なぜ黙殺できなかったのか？ダグラスにけしかけられたからである。「悪い人でも親は親」というような常識はダグラスには初めから欠落していた。そして，自分と異なるものに牽かれる反面，自分に似たものを嫌う一種の深層心理につきあげられでもしたように，かれは実の父親をワイルドに告訴させる。こうして，いわゆるクイーンズベリー裁判が始まり，けっきょく，ワイルドの敗訴と投獄で陰惨な一件落着となる。まずペントンヴィルの，ついでウォンズワースの牢獄をへてレディング牢獄に入ったのは11月20日のことである。すでにオスカー・ワイルドという輝やかしくもまた悪名高い名を抹消されて，いまはただのＣ．３．３．（Ｃ棟三階三号室）という単なる，しかも忌わしい番号になりはてたかれは，1897年の１月から３月までのあいだに長い，つらい手紙を書く，'Dear Bosie, After long and fruitless waiting I have determined to write to you myself...' で始まる手紙を。'Bosie' はダグラスの愛称であるから，これはかれへの恨みつらみを晴らすワイルドの書簡なのであって，その全貌はルパート・ハート＝デイヴィス編纂の『オスカー・ワイルド書簡集』（pp. 423-511）によって歿後六十二年で初めて明らかにされた。というのは，まだ存命の人々や関係者への配慮もあって，ロバート・ロスは，1905年，ワイルド自身から手渡された自筆の草稿から，ダグラスおよび牢獄に関する部分をすべて切り捨て，全体の半分以下を *De Profundis*（我ふかき渕より〔汝をよべり主よねがわくはわが声をきゝ，汝のみゝをわが懇求（ねがい）のこえにかたぶけたまえ〕）と題して公刊したのだった。この『獄中記』をめぐる出版の歴史は，はからずもロス対ダグラスのワイルド争奪史となり，ダグラスはロスをユダ呼ばわりする。なるほど，ロスの『獄中記』は，いわば白く塗られたる墓であり，その信仰告白はあまりにもきれいすぎる。たとえワイルドにたいするロスの敬愛がどれほど真実なものであったとしても，このような編集は改竄の一種であり，ワイルドの素志と願いを裏切るものと批判され非難されても仕方ないであろう。では，ダグラスはイスカリオテのユダではなかったのか？　たしかに，かれは「銀三十」で師を売りはしなかった。したがって「その銀を聖所に投げすてて去り，ゆきてみずから縊れ」ることもなかった。しかし，ワイルドの生きていたあいだ，およびその死後，かれ自身の世を去る45年間に，いったいダグラスはワイルドのためになにをしたか？　とにもかくにもロスはかれなりに，白く塗られたる墓にもせよ墓をたてたのだ。かれがいなかったら，どれだけ多くのものがワイルドから失われてしまったことであろう。

これに反して，アルフレッド・ダグラスがワイルドのためにしたことといえば，『まじ

めが肝心』の作者・『藝術論』の批評家に，ホモの快楽を——さよう，それは異性間の性行為のそれにまさるとも劣らぬ快楽だったにちがいない——与えるかわりに，かれから遊惰と美食を貧りとっただけである。このことは，あれほど美食と遊惰を美徳として湯水のごとく金銭を浪費して悔むところのなかったワイルドが，ことこまかにダグラスへの貸しを『獄中記』に書きとめていることからだけでも明らかである。

しかも，1900年11月30日，ワイルドがパリで窮死したあと，ダグラスは幾冊かのワイルド回想記を発表した。しかし，それらはいずれも，ワイルドを語ることによって自分のことを弁解し擁護しようとしたものにほかならない。そのうちのひとつ，*Without Apology*（1938年）など，その書名にもかかわらず皮肉にも 'With Apology' なのである。

ワイルドがものを書いていたとき，いつもわたしはかれのそばにいた，とダグラスは誇らしげに恩着せがましくいう。それは真赤な嘘ではない。1894年の8月から9月まで，ワージングであの『まじめが肝心』を執筆中，ワイルドのそばにかれはいたのだから。しかし，それは，「そばにいた」というだけの話であって，しかもしばしばかれのもとからワイルドは離れよう逃げようとさえしている，あわれにも離れられず逃げられもしなかったが。

ダグラスの前半生がワイルドとの絡みをもって塗りつぶされているとすれば，かれの後半生は告訴魔もしくは裁判狂という性癖によって彩られた。それは，もともと法律によって裁かれるべき性質のものではない問題を法廷にもち出すという被害忘想の悲壮な喜劇なのであって，この点をバーナード・ショウは，きびしい揶揄と，おどけた忍耐をもって，ダグラスに戒めている（Hyde, Mary, ed. by, *Bernard Shaw and Alfred Douglas*. A Correspondence. 1982）。

なにかにこだわる，という意味ではダグラスは十人並であるが，ただそのこだわりかたが異常なまでにくどい。それは幼児コンプレックスとしか名づけようのない未熟な精神である。かつて三島由紀夫はダグラスを「小悪魔」と呼び，ワイルドにたいする以上の親愛の情をかれに寄せたが，しょせん，かれは悪魔にすぎず，とても大悪魔にはなれなかった。

ワイルドを光とすれば，ダグラスは影であった。そして光のないところに影はないが，また影がなければ光は光でありえない。ダグラスのためにワイルドは人間としてすっかりだめになった。と同時に，かれはダグラスのおかげで『獄中記』と『レディング牢獄の唄』を書くことができたのである。ドリアンがダグラスを模倣する以上に，ダグラスはドリアンを模倣する。『ドリアン・グレエの絵姿』は，ワイルドがダグラスに会う前の年の七月に雑誌に発表されていた。その後，かれがダグラスに会った年の四月に，この長篇は増補のうえ単行本として出版されるが，ドリアンは元のドリアンと少しも変らず，いささかもダグラスとのかかわりは見られない。ドリアンはダグラスをモデルにしたものではなく，アルフレッド・ダグラスこそドリアン・グレエのイミテイションだったのである。